

## 宇倍野陵墓参考地内「岡益の石堂」の保存処理・調査報告

はじめに

宇倍野陵墓参考地は、鳥取県岩美郡国府町大字岡益字おがま字繁谷北六九一番地（旧・法美郡御陵村岡益字いしんちう石堂）にあり、域内には地元で「岡益の石堂」あるいは単に「石堂」と呼ばれる特異な石造物があつて、この陵墓参考地の中心、墳塋となつている。すなわちこの石堂は、一辺約六メートル、高さ約〇・九メートルの方形基壇を設け、基壇上の周縁を幅約〇・八〜一メートルの犬走とし、その内側に地覆石を置いた上に一辺約四・三メートル、高さ最高約二・一メートル、厚さ約〇・四メートルの石障を方形にめぐらし、その中央に礎石を置いて円柱を建て、この上に中台状石その他を載せるものである。一部モルタルで修復された部分のぞき、用材はすべて地元で産出する緑色凝灰角礫岩である。石障には、東辺中央に幅約一・二メートルの出入口を設ける。中央の円柱の裾部には二重の蓮弁が彫刻されていたといわれるが、現在は剝落し、その痕跡を見る。中台状石の下面にはパルメット文が浮彫されている。

石堂本体は、円柱のエンタシス、中台状石のパルメット文、使用された尺度（高麗尺）などから、六朝〜唐代の中国本土または朝鮮半島の仏教文化の影響を受けて、飛鳥白鳳時代に建立されたというのがもつとも有力な説である。

石堂は、元来が脆弱な凝灰岩製であり、長年にわたる雨水など浸潤水に珪素分が溶出して粘り（性根）が抜け、浸潤水の一部は凝灰岩と反応して塩を生じ、これがまた凝灰岩を劣化させるという経年による劣化、冬季における浸潤水の凍結・膨張による風化が進行していた。そのうえ、地衣類が繁茂し、その根からの分泌物によって凝灰岩が溶解するとともに湿潤な環境を提供し、さらに地衣類の繁茂と冬季の凍結をもたらし、いた。特に円柱は、これらに加えて上部石材が過重なため亀裂・剝落が著しかった。そこで、もつとも劣化と風化が顕著な石堂の中央にある石塔を保存処理することとした。

保存処理は、礎石・円柱は現状のままで、中台状石以上は解体して施工した。その方法は、欠落部は擬岩を充填し、亀裂はエポキシ樹脂を注入し、基質は強化処理し、表面は強化処理とともに撥水処理を施し、円

柱と中台を安定するように接合しなおした。なお、礎石の浮いている部分も処理した。

風化状況・基本的な保存策について坪井清足元奈良国立文化財研究所所長・近江昌司天理大学教授に、また風化原因、基本的な保存処理法、細部の具体的な処理方法などについて沢田正昭奈良国立文化財研究所蔵文化財センター研究指導部長にそれぞれ現地検分を願い、その指導と助言を受けながら処理を進めた。復旧は本来の中台状石までとし、その上に載っていた斗形石と各種石塔部材は、本来のものとは考えられず、また円柱への荷重を軽減するため、域内の適当な場所に安置する計画のところ、地元国府町の希望にそって因幡万葉歴史館に研究資料として貸出した。

この保存処理に際しては、保存処理をしない礎石が復旧後の円柱と中台状石を支えるだけの支持力を持つかを確認する試掘調査、処理前の現状を記録する地上写真測量、石障などの円圏でかこったS字状文や中台状石下面のパルメット文などの彫刻の有無を確認し、採拓する調査を中心とする現況調査を行った。これらの調査は、地元の要望があつて宮内庁（笠野毅・福尾正彦・清喜祐二）、鳥取県教育委員会（加藤隆昭・中原斉・山柘雅美・原田雅弘）、国府町教育委員会（津川ひとみ）の三者が共同で行った。

以下、石堂の保存処理及び各種の現況調査について報告する。これに際しては、先ず、その歴史的・地理的環境、沿革から述べることとする。

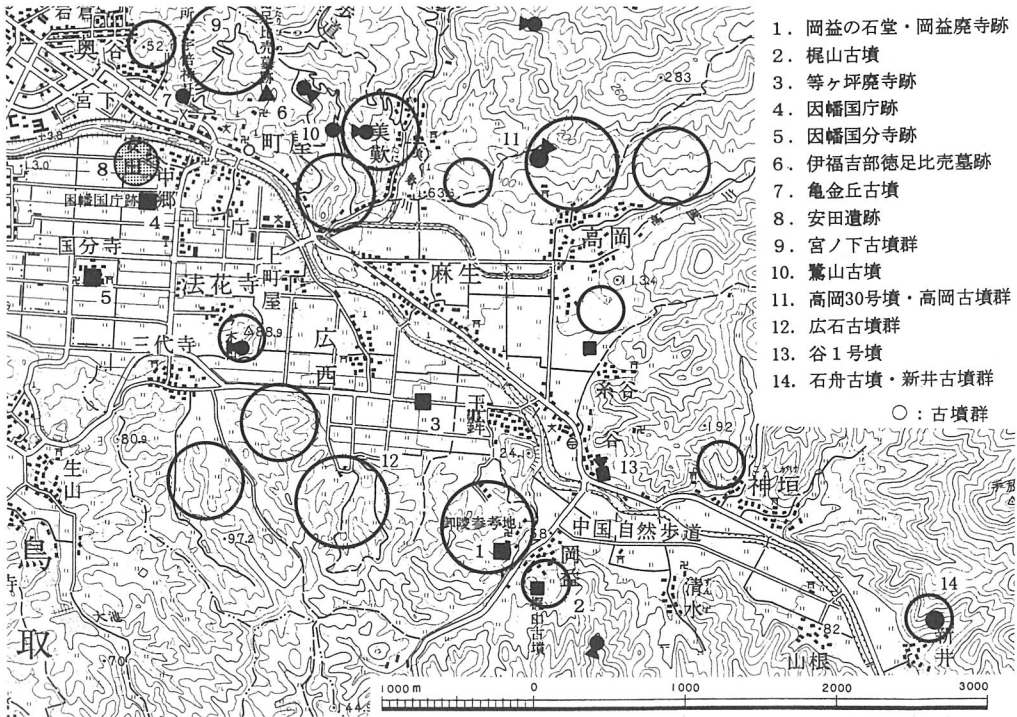
（笠野 毅）

## 一 周辺の環境

宇倍野陵墓参考地が所在する国府町は、鳥取県の東端に位置し、北は岩美郡岩美町・福部村、東は兵庫県美方郡温泉町、南は八頭郡郡家町、西は鳥取市に接しており、南北七キロメートル、東西一八キロメートルを測る東西に細長い町である。町の中央を鳥取東部最大の河川である千代川の支流で、扇ノ山（標高一三〇メートル）山系に源を発する袋川（雨滝川）が東から西へ貫流し、岡益の石堂は、袋川が山間部から法美平野に流入するあたりの左岸、岡益集落西側の丘陵上に位置する。この地は、袋川を遡り十王峠を経て但馬地方へ至る雨滝街道と、郡家町私都へ至る古道が交差する交通の要衝にあたる。丘陵からは北西に法美平野を望むことができ、水田との比高差は約三〇メートルを測る（第1図）。

石堂は、郡家町との間に横たわる山塊から東方に延びる枝尾根の一つで、地元で「石堂の森」と呼ばれる標高九〇メートルの丘陵先端部のごく緩やかな傾斜地に立地している。

法美平野およびその周辺の原始・古代の主要な遺跡について時代を追って概観すると、旧石器・縄文時代の遺跡については未だに不明な点が多いため、今後の調査を待たねばならず、確実に人間の生活の痕跡が認



第1図 宇倍野陵墓参考地周辺の環境 (1/50000)

1. 岡益の石堂・岡益廃寺跡
  2. 梶山古墳
  3. 等ヶ坪廃寺跡
  4. 因幡国庁跡
  5. 因幡国分寺跡
  6. 伊福吉部徳足比売墓跡
  7. 亀金丘古墳
  8. 安田遺跡
  9. 宮ノ下古墳群
  10. 鷺山古墳
  11. 高岡30号墳・高岡古墳群
  12. 広石古墳群
  13. 谷1号墳
  14. 石舟古墳・新井古墳群
- ：古墳群

められるようになるのは弥生時代以降である。袋川に近い安田集落西方にある安田遺跡<sup>(3)</sup>では、多量の弥生土器とともに弥生時代中期の貯蔵穴・竪穴住居跡が検出されており、弥生時代終末期には、袋川を挟んだ岡益の対岸に、四隅突出型墳丘墓の糸谷一号墳<sup>(4)</sup>が造営されている。

古墳時代になると、法美平野周辺における古墳の分布密度は濃く、平野を望む丘陵上には多くの古墳が造営されて、大きな古墳群を形成している。袋川右岸には西から奥谷古墳群・宮ノ下古墳群・町屋古墳群・美敷古墳群・高岡古墳群・山出古墳群・森原古墳群・糸谷古墳群等があり、宇倍神社境内には竪穴式石室から銅鏡などを出土した亀金丘古墳<sup>(かめがねおか)</sup>（宮ノ下四六号墳）、横穴式石室内に魚や鳥の線刻壁画を描いた裝飾古墳<sup>(さき)</sup>の鷺山古墳（町屋一八号墳）等、二五〇基以上の古墳が展開している。前方後円墳も全長五八・五メートルの高岡三〇号墳、全長二九・五メートルの谷一号墳（前方後方墳）をはじめ六基が知られている<sup>(5)</sup>。

一方、袋川左岸には今木山古墳群・南広西古墳群・三代寺古墳群・広西古墳群・岡益古墳群等、一三〇基以上が古墳群を形成し、前方後円墳も全長三〇メートルの清水一号墳<sup>(すずみず)</sup>ほか一基が知られている。岡益地区の南側に位置する梶山丘陵には、横穴墓を含めて一三基の古墳が分布しており、この古墳群で中心的な位置を占めるのが、近年の調査で前面に三段の石積を備えた多角形墳であることが明らかになった史跡梶山古墳である<sup>(6)</sup>。梶山古墳は、凝灰岩切石積の横穴式石室の玄室奥壁に魚や円文・三角文等が彩色で描かれた裝飾古墳としても知られており、石室の自在

な石材加工技術等から石堂との関係が注目されている。

なお、袋川中・上流域の山間部にも神垣古墳群・新井古墳群・栃本古墳群等の小規模な古墳群が形成され、「二位の尼」の墓との伝承を持つ石舟古墳は、横穴式石室内に精美な家形石棺が安置されていることで知られている。

飛鳥時代以降になると法美平野東部の玉鉾地区の平野部に等ヶ坪廃寺跡（白鳳期）が造営され、礎石や軒丸瓦・鴟尾が出土している。さらに玉鉾地区の南東一キロメートルにあたる宇倍野陵墓参考地西側に隣接する山林にも礎石が点在し、付近から瓦が出土することから岡益廃寺跡（白鳳期）と呼ばれている。当陵墓参考地の整備（切土）の過程で出土したと思われる礎石様の大石が境界沿いに何個となく散在し、岡益廃寺跡の範囲は、当陵墓参考地の半ば以上に及ぶことを推測させ、石堂が岡益廃寺跡の伽藍の一部、塔ではないかとの説の根拠ともなっている。

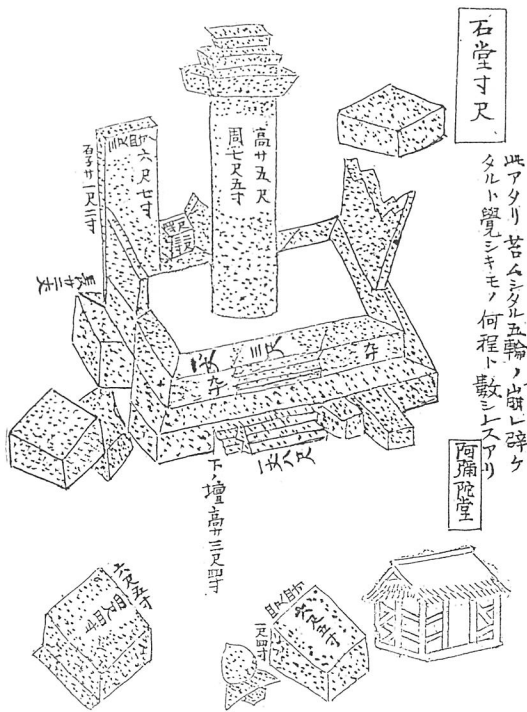
奈良・平安時代以降には、法美平野西部の中郷・安田地区で史跡因幡国庁跡、国分寺・法花寺地区では国分僧寺が確認されており、法美郡は古代因幡国の中心地であったと考えられている。平野北側に位置する稲葉山には、因幡一の宮である宇倍神社が鎮座し、この宇倍神社東方の山中には和銅三（七一〇）年の墓誌銘のある伊福吉部徳足比売銅製骨蔵器が出土した史跡伊福吉部徳足比売墓跡があつて、この地が『因幡国伊福部臣古志』に伝える古代豪族伊福吉部氏の本貫地であったことが知られる。

なお、岡益の石堂のある地域は、古代にあつては因幡国法美郡度木（罵城）郷に属していたと考えられている。（中原 斉）

## 二 「岡益の石堂」の沿革

岡益の石堂に関する文献上の初見は、江戸時代の貞享五（一六八八）年に小泉友賢（一六二二～一六九二）が著した『稻葉民談記』（以下『民談記』という）である。『民談記』では、「石堂」について、その規模・構造等を述べており、「堂ノ内ニハ高サ五、六尺マハリ一抱バカリノ五輪アリ、又一尺五寸四方ニキリタル石ニツアリ」と石柱と思われる表現も認められる。

次いで宝暦二（一七五二）年に上野忠親（一六八四～一七五五）が著した『勝見名蹟志』（以下『名蹟志』という）巻之七では『民談記』の記述を引きながら、「故事篇ニハ石堂ノ寸尺マデ書テ、民談ニ書タルヨリモ委細ナリ」として寸法を記入した見取図を載せており、当時の状況をかかなり正確に知ることができ（第2図）。なお、『民談記』で三方が倒れ一方のみが立っているとされた石障は、この段階では全て倒伏しており、寛文二（一六六二）年五月の大地震で倒れたとの村人の話を伝えている。また、『民談記』のいう「五輪」についても「予ガ見タルハ石ノ柱ナリ」と石柱であることを明記している。さらに、見取図では石柱上に三石が描かれており、「中台状石」「斗形状石」等を表現していると



第2図 江戸時代宝暦年間「岡益の石堂」  
 (『勝見名蹟志』より) (一部加筆)

考えられるが、この段階では層塔笠石等と考えられる石材は載せられていないようである。このように『民談記』及び『名蹟志』の記述と見取図により、石堂は少なくとも江戸時代前期には、後に触れる明治時代の修理直前の姿とあまり変わらない状態であったことが確認できる。

さらに『名蹟志』では、石堂の性格について、「里人ニ尋スレバ武内ノ御廟ト言伝フト云者モアリ、又ハ安徳天皇ノ御陵ナリト云伝フト云者モアリ、一決セズ」と記しているが、「墳墓トハ後ノ推量ニテ証拠ナシ」として、むしろ神仏習合などに関係のある神廟ではないかという見解を

示している。

寛政七(一七九五)年には、安陪恭庵(一七三四〜一八〇八)が『因幡志』の中で石堂について触れ、「其上ノ一重ハ二間四方、高サ一尺二寸、厚サ上面二尺三寸、但シ重ネ石ニテ築廻シ、其中ヲ土ト小石ニテ詰合せ、如何ニモ平ニ製造シテ、其中位ニ長六尺餘ノ無縫塔ヲ安ズ」と注目すべき記述が認められる。見取図も残しているが、『民談記』や『名蹟志』ほど正確なものとはいえない。その図には、無縫塔とした石柱の基部に蓮弁が、南地覆石南面中央に「S字状刻印」が表現されている。

また、石堂の性格については「郡中ノ口碑ニハ人王八十一代安徳天皇ノ陵トイヒ伝ヘタリ」とし、安徳天皇因幡潜幸の伝承等を紹介している。さらに石堂周辺に平家貴族の墓と伝える五輪が多数あること、石堂を平盛継の末孫を称する西尾氏が守護してきたことなども記しており、江戸時代後期には石堂と安徳天皇伝説を結びつける考えが定着していたようである。このためか、天保七(一八三六)年八月には、鳥取藩主池田斉訓が岡益の石堂を視察している。

明治時代になると、『因幡志』等の記述に基づき、御陵村(当時)の長通寺住職であった牛尾得明により、明治一五年以降、岡益の石堂を安徳天皇陵に治定するよう宮内省に上申がなされる。明治二八年一二月四日、宮内省は岡益の石堂を安徳天皇に縁故ある見込みから陵墓参考地に治定して保存し、翌年五月三〇日には、民有地二六六坪を買収、官有地一九九坪と併せて陵墓参考地の区域を定めている。明治三〇年には、こ

れらを鳥取県から引継ぎ、以後、宮内省・宮内府・宮内庁が管理して今に至っている。その間、明治三二年には修営工事がなされ、翌年一月二七日に竣工、現在の体裁がほぼ整えられたようである。すなわち、長通寺所蔵の写真(図版二上)にあるように倒壊が著しかった基壇・石障・石塔を組直し、四周に小土堤をめぐらして外側に石垣を積み、その外周の土地を切盛りして地均しをするともに、域内にあった「阿弥陀堂」と称される堂宇の移転などを行っている<sup>(12)</sup>。

こうして整備された後も、岡益の石堂は、地域の人々から安徳天皇陵として尊崇を集め、大正五年の安徳天皇七三三年忌大祭典には数万人の参詣者があったと伝えられ、毎年忌日とされる九月一三日前後に行われる「御陵祭」は現在も続いている。

石堂が学術的な視点から研究の対象となったのは戦後のことであり、福山敏男・川勝政太郎等<sup>(13)</sup>が大陸の美術的影響を色濃くとどめる石堂に注目し、福山敏男は中国六朝時代や朝鮮三国時代美術の影響が認められ、六く七世紀における大陸文化移入を特徴づけるものと位置づけている。

また、川勝政太郎は北斉時代の石柱と対比すべきものとしている。これに刺激を受けて荻原直正等<sup>(14)</sup>の地元研究者も精力的に研究を行ったが、中でも川上貞夫は昭和三〇年に宮内庁の許可を得て石堂の現地調査を行った。川上は石堂を建築学的な視野から取り上げ、特に立面プロポーシヨンや平面プランに関して研究を重ね、昭和四一年には長年の研究成果をまとめた『岡益の石堂』を上梓している<sup>(15)</sup>。岡益の石堂について、今日ま

でこれを凌ぐ調査報告はなされていないといっても過言ではない。

その後、昭和五三年に石堂にも近い梶山古墳の石室奥壁から彩色壁画が発見されたことが契機となって、古代日本海文化圏を提唱する森浩一や、江上波夫・田村節子等<sup>(16)</sup>により大陸文化との関わりから再び石堂が取り上げられている。

近年では、平勢隆郎が川上貞夫の計測的研究を発展させ、石堂の設計・建築基準単位について精緻な検討を行うとともに、渤海の石燈籠に源流を求めるべきものとしている<sup>(17)</sup>。また、岡田保造は等閑視されていた感のある「S字状刻印」を採り上げ、近世城郭の石垣に見られる刻印との関連性を指摘している<sup>(18)</sup>。石谷寸美子は石堂を古代豪族伊福吉部氏の祖廟ととらえ、『因幡国伊福部臣古志』によって、石堂の造建者に伊福吉部国足を比定している<sup>(19)</sup>。

なお、石堂の後方に隣接する岡益廃寺跡では、平成九年度から鳥取県埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われ、石堂の西側に基壇建物の基礎地業等が確認され、石堂との関係が注目されている。

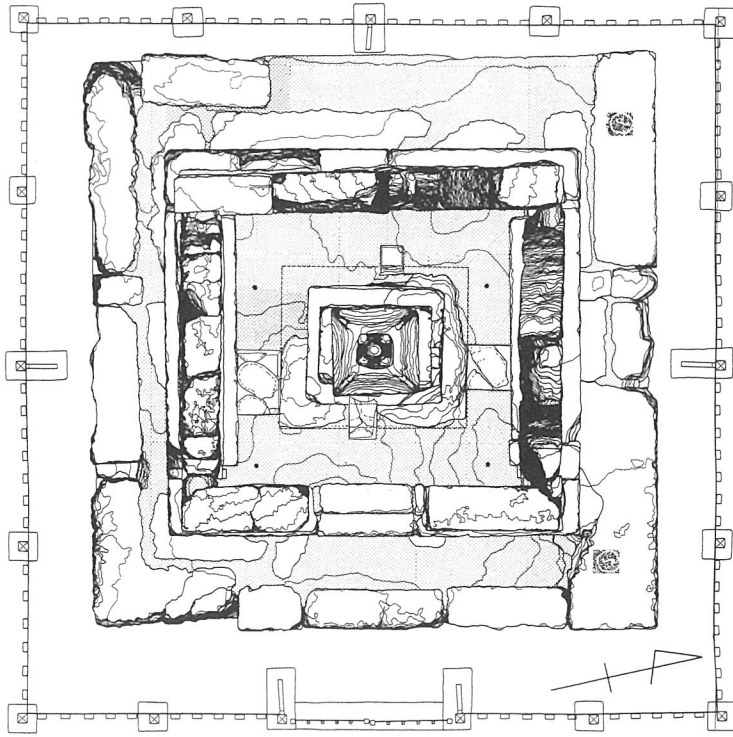
(笠野 毅・中原 斉)

### 三 調 査

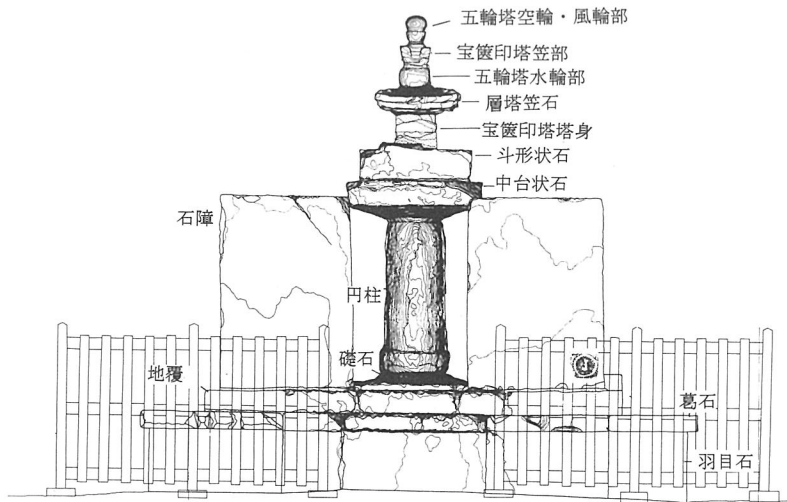
#### (一) 試掘調査

石堂石障内の円柱が据えられた礎石が、保存処理・復旧後も充分に耐

えられる強度をもっているかどうか、礎石の形状・法量・材質・遺存度、本来の床面（礎石の下の構造）等を確認するため、礎石の周辺に小さなトレンチを設定、試掘することとした。



1 平面図



2 東(正)面立面図

第3図 宇倍野陵墓参考地内「岡益の石堂」の平面および東(正)面立面図

調査した石障内(第3図)は、四周を繞る地覆石によって方形に画され(内法は一辺約二・九メートル)、その中央に礎石が据わっている。地覆石の内側面から礎石の周縁部にかけては広くモルタルが塗られている。

る(第3図網掛部分。これは調査後の状況ではあるが、調査前とほとんど変わらない)ため、礎石の形状や地覆石と礎石の間の状況などが表面からは判然としていなかった。礎石は、モルタルが塗られていない部分の形状から、おそらく平面方形と推測できるものの、確証のあるものではなく、法量も明らかではなかった。また礎石の表面は、平滑ではなく、経年の風化による細かな凹凸がある粗いもので、これだけから礎石の強度を憶測するのも危険であった。

試掘調査は、平成九年五月二七～二九日の間行った。すなわち、二七日、当陵墓参考地の現状、調査方法、発掘調査器材等を確認。翌二八日、礎石の南・北二箇所に小トレンチを設定、発掘に着手。礎石と石障下部の地覆石との間は扁平な河原石を挟んで三層から成ること、試錘によると、それらの下に非常に堅い層があることが判明。南トレンチを拡張、河原石を外して掘下げ、床石を確認。二九日、礎石の法量確認のため東・西二箇所に小トレンチを追加設定、発掘。南・北両トレンチと同様の所見を得る。また南トレンチで地覆石と床石がモルタルで接合されていることを確認。図取り、写真撮影を完了。築込みながら埋戻し、表面をモルタルで覆い、復旧。撤収。

この調査の結果、次の所見が得られた。

(1) 礎石は、固めの緑色凝灰角礫岩で、剝離やクラックはあるものの、比較的良好的な遺存度を示し、後掲の法量があつて保存処理と復旧の後も安定的な支持力を持つこと。

(2) 基壇上面には全面に切石を敷き詰め、石障内の床石とし、礎石はこの上に据えられたと推測されること。

(3) 礎石は、長さ(南北)約一九八センチ、幅(東西)約一七二センチ、厚さ三〇センチ以上の扁平な直方体の切石と推定されること。

(4) 現在の石障地覆石は、明治三二年以降に据え直されたものであること。

(5) この地覆石と礎石との間は河原石と土とで埋められており、この地業は地覆石据直以降であること。

(6) 礎石の一部に剝離して浮いた部分があること。

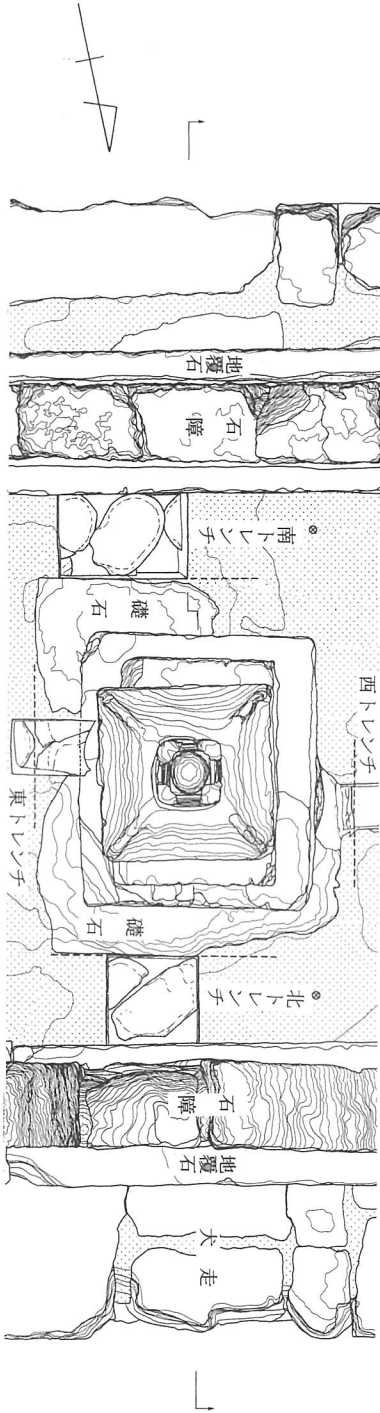
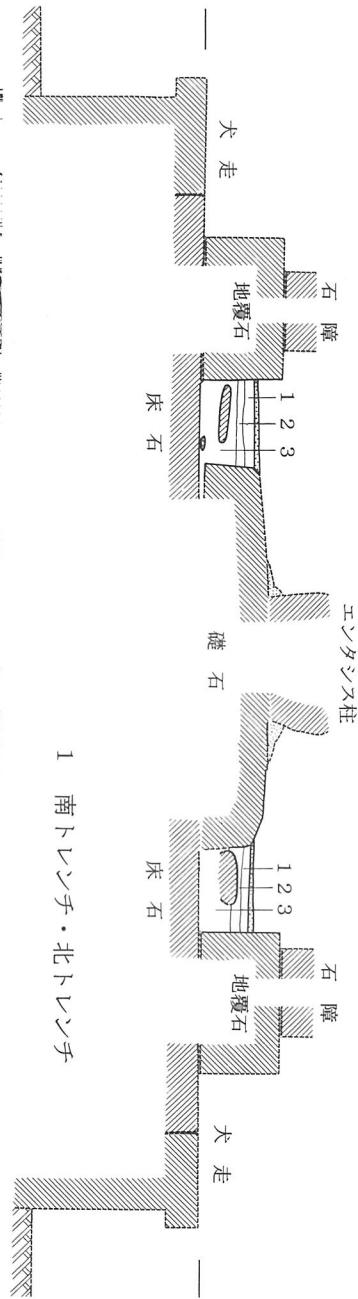
これらの所見が得られた各トレンチの状況は、基本的には同じであつたので、もつとも深く発掘した南トレンチを中心に以下に記述する(第4図1・2)。

表面の厚さ三センチ前後のモルタルを外すと、三層に細分される土層があり、この下に緑色凝灰角礫岩の切石の床石が据えられている。

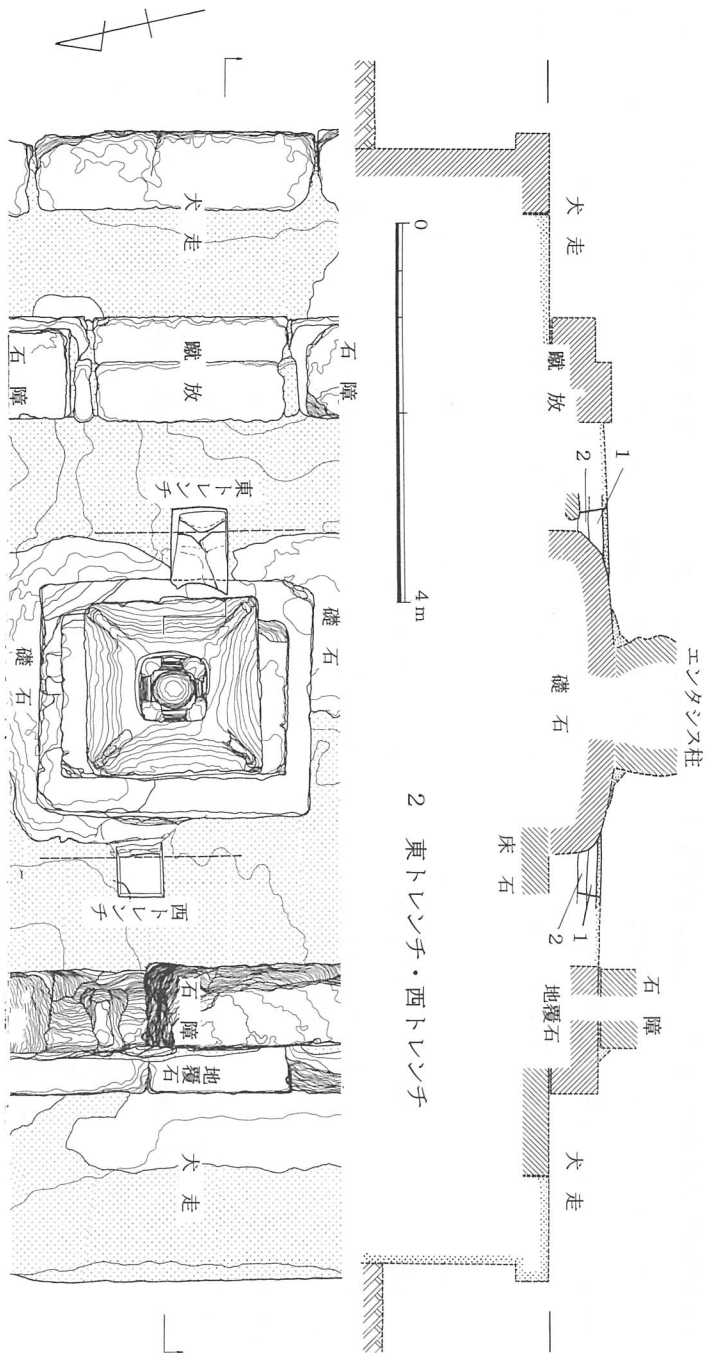
土層の第1層は、柔らかい赤土。この付近で産出する土で、自然な状態ではやや固めの小土塊を含む。この小土塊を径約四センチ以下に細かく砕いて用いる。北トレンチの第1層から焼けた布目瓦二片が出土(第5図1・2)した。北トレンチの第1層は、層厚が薄い。第2層は、黄白色ないし濁白色の精選された小砂利と粗砂の 마사土で、固く締まっている。最上部が黒味がかつており、一時期地表であつたことを窺わせる。第3層は、第1層と同じ赤土で、小さく砕かれた細塊を含む。上半部に

は扁平な河原石を敷列べる。石と石との間隙や河原石の下は（一部は河原石の上も）、赤土がよく締まっています。当所の南東二五〇メートルにある終末期古墳梶山古墳の版築よりも固く緻密である。河原石の上面は、必ずしも同じレベルではなく、南トレンチ断面では第3層

中に潜ったり、北トレンチ断面のように第2層に飛出すが、おおむね第3層上面と合致し、河原石は礎石の周りに踏石状に配されている。第3層下半部は、土がやや柔らかくなるが、上半部と明確には区分できない。この下半部から焼けた布目瓦一片が出土した（第5図3）。



トレンチの平面および実測図 (1/80)



第4図 宇倍野陵墓参考地内「岡益の石堂」  
(破線は推定復原)

以上の土層は、北・東・西の各トレンチでも確認され、礎石の四周をぐるりと繞るものと考えられる。

南トレンチの土層の下には、「床石」が据わっている。上面が平坦な切石で、南は石障地覆石の下に、北は礎石の下に水平にのびる。他の石材と同様の凝灰岩で、凝灰岩としては固く、露出させた範囲には顕著な

劣化や風化の跡は認められない。北・西の両トレンチでも試錘によって土層の下に床石の存在が確認された。東トレンチでは床石が確認されなかったが、試錘箇所がたまたま石の継ぎ目であったかも知れず、この結果だけでは東には床石がないと即断するわけにはいかない。また確認された床石上面は、石障外周の基壇上面の犬走と同じレベルである。基壇上

面には全面に切石を敷詰め、礎石はこの上に据えられたと推測される。

石障の地覆石は、この床石の上に載っており、両者の間はモルタルが詰められている。したがって石障地覆石と礎石との間に土と川原石とが詰められたのは、地覆石が現在のようになつたあとでなければならぬし、それはおそらく明治三二年の修補以降であろう。ただし、それ以前においても地覆石が四周を繞り、その内側は土と小石とを詰め、平らにしてあつたことは、前掲の『因幡志』に見えるところであつて、現在の状況は、従前の形態を基本的に踏襲したものと考えられる。

円柱が据えられている礎石は、南北の両トレンチでは小叩きして平らに整えられた側面が出土し、両側面の間隔は一九八センチを測る。南トレンチに見える側面は、厚さ二五センチで、その下面と床石とは三センチほどの間隔をあけて続くことが一〇センチほど奥まで確認された。おそらく礎石と床石は中心部で接しており、礎石は床石の上に据えられていると推測される。礎石の上面の現状は、先述のとおり円柱の周囲全面が剝離し、周縁部にいくにしたがつて著しい。北トレンチの礎石上面は、円柱に至るまであまり剝離していず、本来の形状を比較的よく遺しているものと考えられる。

東・西両トレンチの礎石は、上面周縁から側面にかけて剝離が著しく、特に東トレンチでは、大きなクラックが入っているが、平らに整えられた側面の一部が南トレンチの南端・北端でそれぞれ認められ、その走向は南・北両トレンチの礎石側面に対して直交する。したがって礎石はほ

ぼ第3図破線のような平面長方形と考えられ、東西の幅は一七二センチとなる。また本来の礎石の形状としては、上・下面にやや不安が残るが、およそ直方体の切石と推測される。

また礎石の東部上面には、表面上はわからないが、打診によつて内部が剝離して浮いた部分があることが確認された。

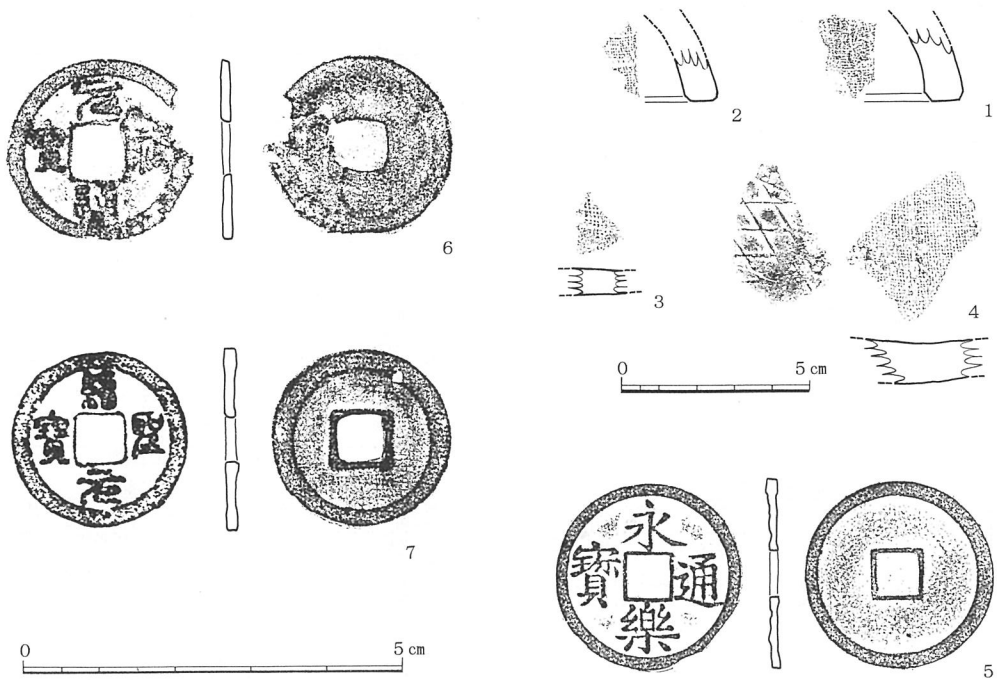
この調査によつて焼けた布目瓦が三片出土した。

第5図1・2は北トレンチ土層第1層から、3は南トレンチ土層第3層から出土したものである。1・2は丸瓦と思われ、側縁に面取りを施す。3は平瓦と思われる。すべて薄橙色を呈し、二次的な火を受けている。これらが、地覆石と礎石の間を埋めた土の中に含まれていることは、土層の形成や河原石の敷設の時期が、石堂造営当時ではなく、後世に下ることを示す。なお、4は、当陵墓参考地の東辺の境界沿いで表面採集した平瓦の破片で、凹面に布目、凸面に斜格子の叩目を残す。

以上の調査の結果、礎石の浮いた部分以外は予定どおり保存処理・復旧して支障のないことが確認され、礎石の浮いた部分は外して接着することとした。(笠野 毅・山根雅美・津川ひとみ)

## (二) 石堂の現況調査(付図1・2)

石堂は基壇、石障(石囲)、石塔により構成され、昭和四二年に取設けられた鉄柵が四囲を巡っている。石材はいずれも地元産する緑色凝灰角礫岩を使用している。基壇東面の方位は真北より西へ約一二度振れ



第5図 宇倍野陵墓参考地の出土遺物（瓦は1/4、古銭は実大）

ている。以下、現在の正面を東側として記述を加えたい。

なお、詳細な計測値等は第1表を参照されたい。

A 基壇・羽目石・葛石・犬走

基壇は、東面で幅六・〇三メートル、北面での奥行六・一二メートル、北端での高さ〇・九三メートルを測る。凝灰岩の切石を使用した一成基壇で、羽目石とその上部の葛石とは、視認できる範囲では一石造である。『因幡志』所収の見取図には羽目石の下部に「地覆石」が描かれ、また、川上貞夫に拠れば、羽目石の下部にさらに「地覆石」の存在が指摘されているものの、今回の調査では確認していない。四隅を重複して数えると、東面五石、北面三石、西面三石以上、南面四石で、総数一一石以上で構成される。

北面の東面側と西面側を除いて、葛石と犬走の幅は一致しない。ただし、補強用のモルタルが基壇上面を覆っている部分もあり、一部疑問のある箇所も存する。葛石上面（犬走）は遺存状況のよい東面北端の石では幅〇・九五メートル、長さ二・五二メートルを測る。その幅は、東面北端・西面北端の石材をのぞき、〇・四〇・六メートル内に収まっている。ただし、内側部分はモルタルが覆っており、内側に延びることも考えられる。例外とした北面両端の石材ではともに「S字状」文様の陰刻があることが注意される。葛石は羽目石から一二センチほど外方に突出し縁を形成しているが、突出部の欠損・摩耗が顕著で、隅角部分が丸味を帯びている箇所が多い。以下、各面ごとに記述を加えることとする。

		写真測量図	川上貞夫*	備考			写真測量図	川上貞夫*	備考	
基壇	東面	総高	5.18		石室	地覆	高さ	0.30以上	0.36	
		高さ	0.93	1.01			礎石	高さ	現 1.98	2.01
	幅	6.03	6.04	柱			正面幅	現 1.63	1.77	
	葛石厚	最大 0.20	0.1	部			奥行	1.76	1.78	
	幅	6.00(6.08)	6.09	高さ			最大	0.71	0.75	
西面	幅	6.12		請	径	上	0.57			
	幅	5.98(6.08)	6.09	花	径	下	0.68	(0.72)		
石室	北面	高さ	最大 2.31	2.26~2.27	中	台状石	高さ	0.39	0.42	
		高さ	0.25	0.24	無		高さ	0.27	0.28	
		幅	4.38	4.41	文		幅	上	1.43	1.42
		高さ	0.26		部		幅	下	1.41	
		幅	4.46	4.41	文		奥行	奥行(北面)	1.20	1.18
	南面	高さ	最大 0.41		様	高さ	0.12	0.41		
		幅	4.09	4.09	部	幅	上	1.30		
		高さ	最大 0.40	0.42	斗	幅	下	0.60	0.63	
		幅	4.10~4.13	4.07	形	奥行	奥行(北面)	1.06		
		幅	2.04	2.03	状	高さ	0.33			
障	東面	高さ	2.04	2.03	石	最大高	0.39	0.42		
		幅	1.42	1.40	幅	幅	1.18	1.18		
		高さ	1.44	1.43	奥行	奥行	0.85	0.84		
		幅	2.04~2.07	2.03	突出部	高さ	最大 0.06			
		幅	1.35	1.38	幅	幅	0.48	0.45		
	北面	高さ	最大 0.40	0.42	宝	高さ	0.19(0.30)			
		幅	4.09	4.09	印	幅	0.43			
		幅	4.10		塔	奥行	0.42			
		幅	3.13	(2.88)	身	奥行(北面)	0.42			
		幅	3.90	3.71	塔	高さ	0.30			
南面	高さ	最大 2.00	(1.85)	層	高さ	0.92				
	幅	(3.01)	(2.86)	笠	幅	0.92				
	幅	(3.03)		石	奥行	0.92				
	幅	3.76	(3.70)	五	高さ	0.19				
	幅			輪	径	0.40				

\*川上貞夫「岡益の石室」、1966年 記載の尺貫法に基づき数値をメートル法に換算した数値

第1表 宇倍野陵墓参考地内「岡益の石室」各部材計測値一覧 (単位:m)

東面 五石からなる。正面のラインはほぼ直線的となるが、南端の石材の北側部分が欠損していることもあり、この部分でラインが乱れている。中央の石材は幅一・五メートルほどで、その中心は石塔の中心線に合致しており、両者の密接な関係を推測させる。本石と接する南・北の羽目石との間にはモルタルが充填され、四〇センチ以上は石障側に及ぶようである。葛石部分以外の犬走はモルタルが表面を覆っている。本来は南側石障地覆石に接している部分のように床石が存在したと考えられる。この床石と葛石が南端部分では一石であった可能性も考慮しなければならぬが、現状のプランでは本基壇唯一のL字状を呈している。

北面 三石からなる。前面のラインは中央部以外は揃っている。他の部分と異なり、葛石と犬走の幅がほぼ合致している箇所が多いことが注意され、それに対応するかのようには、中央の石をのぞいて、その両脇の石は幅も二メートルを超える。また、両者には後述するような「S字状」文様が陰刻されている。西側の石材は東端の葛石部分が逆L字状に四〇センチほどカットされ、該所に別造の葛石が落とし込まれている。

このような箇所は他では認められない。中央石の犬走部分では東西方向にモルタルの被覆が認められ、本来一石かどうかは確定できない。西側の葛石の縁では、下隅角部に内転とも考えられる面がある。遺存状況の良好な他の箇所では確認できず、摩耗による欠損と見なすべきであろう。

西面 三石以上で構成されるが、南側の二石目は長手面であるのに対して、両端の二石は小口面を見せている。本石は葛石突出部が大きく欠損

しており、羽目石からの突出が三センチに満たない箇所もある。西面の犬走上面は大半がモルタルによる後世の修補である。石障地覆石に近い部分は石の上面を露呈している。一石造かどうか、さらには残存している羽目石との関係などは明確にしえない。

**南面** 四石からなる。葛石の端部の欠損が目立つため、前面のラインは不揃いである。羽目石の露呈している部分の幅は西側から約二・三メートル、〇・三メートル、一・七五メートル、一・五五メートルとなる。羽目石間にモルタルの充填は認められない。二石目は基壇に使用している一石造の石材としてはもつとも幅狭の面を呈している。また、三石目と四石目の間には幅一〇センチほど葛石が存在していない箇所がある。厳密に記するならば、三石目の東端部分を葛石の厚さだけ打ち欠いているのである。この部分の石障地覆石も後述のように、外に向かって下り勾配となる打ち欠き部分が認められるとともに、石障にも空隙があることから、石障内の排水施設として使用されたものと考えられる。

#### B 石障（石囲）

基壇上には高さ二五〜四〇センチ、幅五四〜七六センチほどの地覆石が置かれている。地覆の前面のラインは、どの面も直線的に揃っている。その上に四方に屏風状に最高で約二メートルを測る石障が立てられ、中央の石塔を取り囲んでいる。地覆石と石障の間は東面側ではほとんど隙間はないが、他の三方では一五センチ以上の犬走的な間が存在している。

**東面** 地覆石四石（中央部は階段状をなしているため二石と数える）、

石障二石からなる。

地覆は小口がL字を呈する石材を使用している。その上面は中央の階段の上面、および石障内の床面と対応している。L字の踏み石部には石障がのっている。この部分では幅五五センチ前後、高さは正面で一五センチを測る。他の三方に比べて幅狭であることが注意される。東側では北から南にかけて三センチほど下降しているが、西面ではむしろ緩やかな逆勾配となっている。地覆の石の間にはモルタルが充填されており、地覆の下部分にも及んでいる。

石障はほぼ同形同大であるが、北側石障のほうがわずかに幅広である。逆に、厚みに関しては南側石障がやや優っている。そのため、石障正面のラインが揃っていない。設置時に石障西面を地覆石の西面、およびL字の踏み石部の奥壁に併せ、基準線としたためであろう。北側石障の北西隅部は一〇センチ角ほど縦方向にしゃくり面をなしており、本来他の石材と組合わさっていたと考えられる。このような面は南側石障の南西隅部でも認められるものの、隅角部分が明確でなく、面取りをしていたかどうかは明らかにしえない。本石障の南側長手は北側長手に比べて、粗い面をなしており、後世の手が加わっていることを推測させる。南側石障北側長手と北側石障東面北下部分には後述するような「S字状」の陰刻がある。

**北面** 地覆石三石、石障一石？からなる。

地覆は全体的に見れば、凸状の縦断面を呈している。中央部での高さ

四三センチ前後である。低くなった部分に東面石障と西面石障を立て、それらに挟まれるように本来一石で構成されていたと考えられる石障が置かれている。現在では分割されて八石からなる。東側の三石は割口の形状からみて元々一石であったことは疑いなく、中央下部の二石もその可能性が高い。しかし、他の石材はモルタルに囲まれていることもあり、疑問を残している。石障東側下部の東面石障に接する部分には高さ約二五センチ×幅約三五センチの長方形の空洞がある。この空洞は一部がさらに下方に一〇数センチのびて、石障内の床面に対応している。同様の空洞部は南面石障の同じような箇所にも認められる。石障内の排水施設として利用されたと考えられよう。その床面はわずかながらも北側に向かって下降しており、北側空洞部のほうが機能したと考えられる。

#### 西面 地覆石四石、石障三石？からなる。

地覆は石障床面に比べて一段低くなっており、東面石障の底面とほぼ同様のレベルで据えられている。北側の二石が隅角部分を比較的良好にとどめているのに対し、南側の二石は摩耗等のため、丸みを有している。

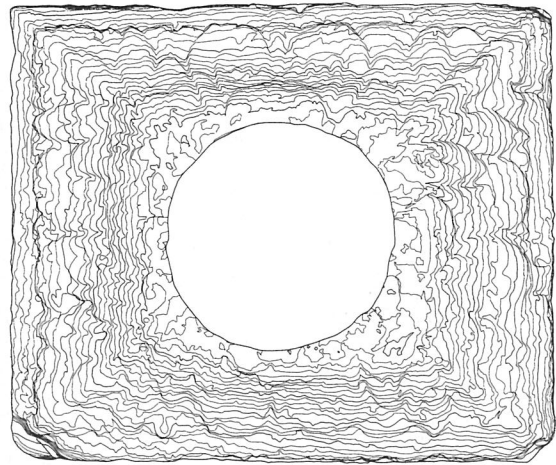
一方、石障は地覆の上にセットされているが、その間にはモルタルが詰められ、芯のほうにも及んでいる。大きく三ブロックに分けられ、南側は幅一・〇五メートルほどの切石の立石である。南側の長手の中央部付近には、「S字状」文様の陰刻が認められる。本石は明治修復前の写真でも同様な状況を保っているように見えるが、石幅に相違があることに加え、中央に縦筋が認められることから、別の石材、つまり、修復後

に立て替えられたものとも考えられる。地覆石との間にモルタルが及んでいることも傍証となろう。大きさから言及すれば、むしろ『名蹟志』に記された高さ「六尺七寸」、幅「三尺四寸」、厚さ「一尺二寸」に酷似している。つまり、明治の修復に当たり、『名蹟志』を参考としたことも考慮すべきかもしれない。中央部は六石からなり、それぞれの石の間はモルタルで充填されている。上面は平坦に揃えているが、南側石より一五センチほど低い。上位の二石は本来は同一石であったであろう。

他の四石はモルタル中に埋め込まれたような状況を示し、各々が接合することはないようである。上端の石の上面を除き、隅角部分は欠損等のため、丸みを有している。北側石は同一と思われる三石と南上隅角部に位置する小丸石からなる。上面のレベルは南側石上面とほぼ同一であるが、北端では二センチほど低くなっている。ここで注目されるのは北側長手面である。この面は三分割されていることもあり、垂直な面をなしてはいないが、その東側の隅角部に「矢」が九個認められる。江戸時代前後以降に分割された証しであろう。「矢」の存在は、少なくとも該所における尺度の復元に疑問を投げかけることとなる。

#### 南面 地覆石三石、石障一石？からなる。

地覆は北面と同じく、凸状の縦断面を呈している。西側の二石は幅七五センチ前後を測る。東側の一石は幅を減じている。東側の一石と二石の間は最大で深さが二〇センチほどU字形に打ち欠かれている。関連する施設が基壇や石障にも認められ、外向きの下り勾配となっていること



第6図 宇倍野陵墓参考地内「岡益の石堂」中台状石見上げ図  
(下が東面) (等高線の間隔: 1cm)

いたとも考えられる。現状は割れて、六石以上からなり、石間にはモルタルが詰められている。とくに東面南側石障との間は厚さ二〇センチ以上にも及ぶ。上面は西側に近い部分で地覆から約二メートルの高さがあるものの、本石はモルタルを下部に充填しているため、浮いたような状況を呈しており、もともとの高さは他の石障と大差なかったであろう。この石と東側上部の石には上面にカギ状の切り込みがある。東面を除く三面の石障は上面が欠損している箇所が多い。当該部分が本来の形状と

から、前述のように石障内の排水施設と考えられよう。中央部の地覆の長手中央には「S字状」文様の陰刻がある。

石障は本来は一石で構成されて

位置を保っているとするならば、梁石などを架構したとも見なせよう。石障南側の中央部、および対応する裏面の南側にも陰刻がある。前者は保存状況も悪くはないが、円枠内をS字と見ることは難しい。また、後者については拓本では比較的鮮明度を保つものの、現場では視認することも難しく、他の刻印と同一視するには疑問を残している。

#### C 石塔

石塔は基壇や石障のほぼ中央部に位置している。つまり、基壇やその上の地覆石、石障それぞれの対角線の交点を求めてみると、いずれもわずかではあるが(距離にして一〇センチ未満)西側南方向にずれている。正面石障の中心線の延長ラインに円柱の中心は据えられており、ここに基準を求めた結果であろうか。

石塔は下から礎石、円柱、中台状石、斗形状石、宝篋印塔塔身、層塔笠石、五輪塔水輪、宝篋印塔塔笠、五輪塔空・風輪で構成されている。

礎石 前述のように南北約一・九八メートル×東西約一・七二メートルの長方形のプランを呈している。厚みは二五センチ以上と推測されている。表面は中央部にかけて緩やかに盛り上がりつついくものの、凹凸が著しく、その低くなった部分には上面をモルタルが覆う。とりわけ、西面南隅角部で顕著である。その中央部には最大高約五センチの円形柱座を径一・四〇メートルほどの範囲に造り出している。この柱座は本来の加工と考えられるが、さらに内側では補強のためのモルタルが径八二センチほど認められ、外見的には二重の円座となっている。

円柱 二重の蓮弁を裾部に浮彫りした柱状の構造物である。中央部が胴膨らみの形状を有するエンタシス柱といわれている。風化等による損傷や剝落が著しく、現況では南南西方向からの眺めにわずかに名残をとどめているにすぎない。その最大径は約七一センチであり、東(正)面観では柱座上端や柱上端部との径の差はそれぞれ三センチ、一六センチほどである。

二重蓮弁部は剝落が進み、その基本単位を抽出することは難しい。川上貞夫の観察所見を参考に精査してみると、半円形の蓮弁八葉を横に連ね、二段重ねとしている。隣接する蓮弁間には後方の弁端を部分的に観察することができる。この弁端は剣菱状となっている箇所があるが、内部の線刻等は認めることができない。

柱の上端部はもつとも細くなっている部分である。この部分にはモルタルが厚く巻かれており、中台状石との接合の強化をはかっている。また、扁平な割石を据えて高さの調整をしている。

中台状石 高さ二七センチほどの無文部と高さ一二センチほどの有文部に分けることができる。前者は上面幅と奥行(北面)が一・四三メートル×一・二〇メートルを測る。上面は中央部がわずかながら盛り上がり(むくり)を有する。側面の上面には高さ八センチほど、外方に約二センチ突出した縁を有したと思われるが、現状では北側に一部をとどめるのみで、他の箇所は判然としない。有文部は斗線りに相当する部分で、段差を伴った緩やかなS字状の側面観を有する。下段部の面には円柱と

の接合部を中心に薄肉のパルメット文が刻まれている。この部分も風化が進んでおり、その基本単位を抽出することは難しい。比較的保存状況のよい背面部分では、斗線りの四隅にのびるパルメットと、その間に蓮弁二葉があり、各葉間をさらに子葉で充填しているようである(図版二下、第6図)。パルメットは最大幅五センチほどの剣先状の主葉を中心に、左右に同様の幅をもつ側葉各二枚が基本単位となるように見える。

しかし、主葉と側葉の間には先端が丸みを有する葉の存在が認められる箇所があったり、主葉の先端が丸みを有している部分もある。この変異が本来の形状なのか、風化などの後世の要因に基づくものかは、にわかには決しがたい。同じく蓮弁二葉の間の剣先状の部分についても、一部で背面では丸みを有しているなどの「変異」がある。

斗形状石 正面幅一・一八メートル、北面での奥行き〇・八五メートルの長方形プランの石である。正面中央やや南より部分が幅約五〇センチ、高さ五センチほど上方に突出している。本来凸状に突出していた部分を打ち欠いて、このような形状に加工したものであろう。この斗形状石と中台状石との接合部には、その周辺にモルタルが充填され、接合の強化や安定が図られていた。斗形状石を撤去したところ、三枚の古銭が認められた。「元祐通寶」(北宋、初鑄一〇八六年)、「紹聖元寶」(北宋、初鑄一〇九四年)、「永樂通寶」(明、初鑄一四〇八年)である(第5図5〜7)。永樂通寶以外は摩耗や損傷が顕著で、遺存状況はよくない。斗形状石の設置に当たって、傾きの微調整に使用されたとも考えられる

が、地鎮具などの可能性も考慮する必要がある。斗形状石の上位には宝篋印塔塔身、層塔笠石、五輪塔水輪、宝篋印塔笠石、五輪塔空・風輪が上載せられている。

**宝篋印塔塔身** 最大高三五センチほどであるが、その上下各三分の一はモルタル部分である。したがって、本材より上部はモルタル発明以後

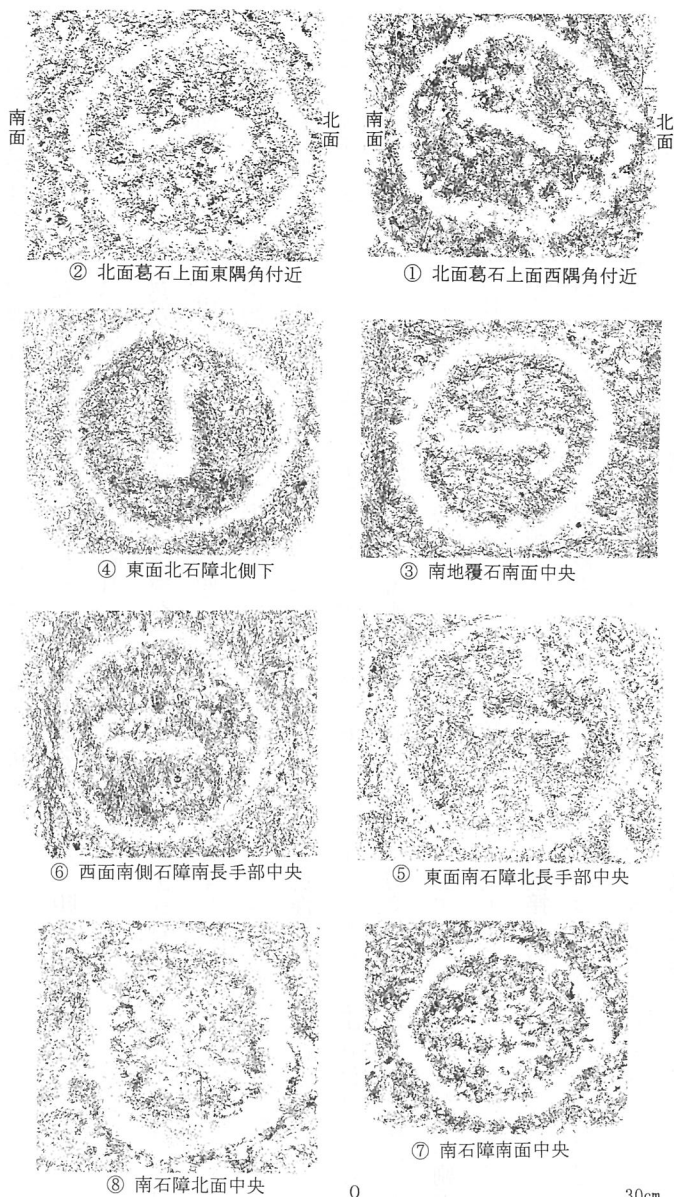
の積み替えであることは明らかである。室町時代後期のものであろう。層塔笠石 一辺〇・九二メートル前後の方形プランを有する四注造りのものである。軒の持ち送りが二段で、軒反りは緩やかである。奈良時代初期のもので、類品が背後の岡益廃寺跡に一枚あり、鳥取市大雲院の茶室前の庭に大小二枚があるという。

**五輪塔水輪、宝篋印塔笠石、五輪塔空・風輪** それ

ぞれの接合部はモルタルによりしっかりと補強・固定されている。いずれも風化が進んでおり、基質部の白肌をも露呈している。宝篋印塔の部材は、室町時代後期、五輪塔の部材は室町時代から安土桃山時代にかけてのものとなる。

**D 刻印**

本石堂には川上貞夫により「S字状の文様を入れた線刻文が6個」あることが指摘され、大陸の春秋戦国



第7図 宇倍野陵墓参考地内「岡益の石堂」の刻印 (1/8)

時代の虺龍文や蟠螭文と関連づけられていた。今回の調査ではS字状の文様を含め、径二二〜二五センチの円枠内の刻印を七(八)箇所確認した(第7図、付図1・2)。施工場所は基壇に二箇所(① 北面葛石上面西隅角付近、② 北面葛石上面東隅角付近)、地覆石一箇所(③ 南地覆石南面中央)、石障五箇所(④ 東面北石障北側下、⑤ 同南石障北長手部中央、⑥ 西面南側石障南長手部中央、⑦ 南石障南面中央、⑧ 南石障北面中央)である。また、現状の円枠内の文様で区別すれば、S字状五箇所(②③⑥)、一状一箇所(①)、不明二箇所(⑦・⑧)となる。ここでS字状と称している刻印は厳密には一箇所のみで、他の四箇所は横位置の〇字文とも呼ぶべきものであり、さらに細かく観察すれば、「つ」の起点を上方に跳ね上げた形状としたほうがより正鵠を射ている。一状もその一類型であろう。これらの刻印は一部を除き、容易に視認できるが、⑧については陰影をつけ、やや斜め方向から見るとの工夫を加えないと、確認は難しい。円枠そのものも彫りが浅く、幅広であり、内部文様も線刻というよりも点刻風である。他の刻印とは同一視しがたい。同様の疑問は⑦にも生じるが、円枠の描き方は①に類似している。ここでは、⑧については断定を避け、確実な刻印は七箇所と考えておきたい。

この刻印の文様がS字ではなく、横位置の〇字に意味があるとするれば、本来の位置はともかく、④は九〇度回転、⑥も天地逆と考えられる。

(福尾正彦・中原 斉)

#### 四 保存処理

保存処理は平成九年五月一日起工、一二月六日竣工したが、実際の作業は八月一八日〜一二月一日までの間で、株式会社アイ・エヌ・テクニカルラボが、以下のように実施した。

**洗浄処理** 十分に水をかけて石材に水を飽和させた後に、洗浄剤を塗布。ペーパーを張り付け、さらに洗浄剤を塗布・含浸させて、その蒸発を防ぐためペーパー上を養生テープで覆い、一昼夜放置した。その後、少量ずつの水をかけながらの刷毛・歯ブラシ・竹串等で洗浄清掃を経て、水を大量に使用して洗浄した。

**仮接着処理** ペーパーを取り除き、十分な洗浄後、仮強化処理に耐えられない箇所について、切削可能という特徴を有するエポキシ軽量モルタルを埋め込み接着を行った。

**仮強化処理** 解体に耐えられる程度に石材強化剤(珪酸エステル)を洗浄瓶・霧吹き・刷毛等を使用して含浸を行った。含浸量は円柱約八リットル、中台状石約六リットルである。

**解体** 円柱と礎石は現位置で保存処理を行い、中台状石より上位の部材は解体し、石堂の西外側に設けた仮設作業場で処理を行った。あらかじめ従前使用されていたモルタルをできるだけハツリ、最上部の五輪塔空・風輪から解体を行った。中台状石を解体する際には、金棒と木棒を

作成し、中台状石との隙間にはインサルバックを発泡させ、クッション材として補強し、本体に影響を与えないように万全の配慮をした。解体した五輪塔空・風輪、宝篋印塔笠石、五輪塔水輪、層塔笠石、宝篋印塔塔身、斗形状石、中台状石は仮設作業場内に収納した。

**解体後の石塔部材の洗浄処理と仮接着処理** 事前に洗浄していなかった石塔類も同様に洗浄処理するとともに、仮接着が必要と思われる石材についても同様な処理を行った。また、薬剤注入強化処理が必要と思われる箇所については、竹串で注入口を確保した。礎石は必要ないと思われる旧モルタルをハツつた後に、同様に洗浄処理を行い、強化に備えた。

**強化処理** 石質強化剤（珪酸エステル、主成分はテトラエチルシリケートオリゴマ）は主に点滴装置を用いて行った。含浸量は円柱約六リットル、中台状石約八リットル、他の石塔類計約五リットルである。中台状石には南北方向に大きなクラックが存在していたため、逆止弁付注入プラグを取り付け、エポキシ樹脂を主剤とする接着剤を低圧で注入した。南・北からの注入量は両方合わせて約三五グラムであった。

**円柱と中台状石との接合面の作成** 中台状石を円柱上に復旧するに際し、傾きを水平に保つため、五ミリパスの同質石材粉六重量部とエポキシ樹脂一重量部の樹脂モルタル組成を行った。中台は東面側がやや高かったため、西面部を〇〜二五ミリ高くした。樹脂モルタルがクッキー状になった時点で二ミリパスの同石材粉を表面にまぶし、接面の滑り止めとした。接面の径は五三センチである。一方、円柱の水平面は二五〇

グラム／平方メートルのガラスクロスにエポキシ樹脂を含浸した。厚みを必要とする箇所については、二ミリパス石材粉とエポキシ軽量モルタルとエポキシ樹脂を混合したものを、一層につき約三〜四ミリの厚さで重ね、さらにその上にガラスクロスを積層して行った。クロス積層は平均六層で仕上げた。接面径は五〇センチである。

**注射器による注入接着** 小さなクラックや浮き部については事前に設けていた注入口からエポキシ注入剤を注射器で注入接着を行った。

**擬岩作成** 擬岩組成は透水性を有する接着剤であるサイトF X 五〇パーセントエマルジョン溶液を一重量部に対し、六の割合の五ミリパス同質石材粉を使用した。予め必要とされる箇所にエポキシプライマーを塗布し、擬岩組成を木片等を使用して叩き込んで、最後に表層の形状に合わせた。盛り付け部は後の成形のため、表層よりやや厚めに行った。

なお、円柱正面についてはサイトF X 五〇パーセントエマルジョン溶液を一重量部に対し、二ミリパス同質石材粉を五の割合で使用した。

**礎石部の補強** モルタルを西側などの一部に残し、その廻りはエポキシ樹脂モルタル組成で視覚的に安定感を与えるように補強した。また、円柱の文様部分に直接接する箇所にはパライン系離型剤を塗布した。

**成形** 一昼夜放置した後、完全に硬化しないうちにノミ等を用いて成形した。

**復旧** 解体していた中台状石を円柱上に戻した。その際、円柱上に二

ミリパス石材粉を使用したエポキシモルタルを団子状に四箇所置いた。その後、隙間は同モルタル組成で接合部を埋め込み成形をした。

古飾・絵付け及び仕上げ アクリル系絵具につや消し剤を貼付して、修復箇所に着色作業を行った。色調は離れてみるとほとんど識別できないが、接近して観察すると判別する程度に仕上げた。

撥水剤処理 古飾後に数日の硬化養生期間を設けた後、シラン系撥水剤（主成分はアルキルシラン系混合物）を洗淨瓶・スプレー・刷毛等を使用して、全石塔類に塗布含浸した。

なお、本処理に併せて、鳥取大学教育学部岡田昭明教授に石材の鑑定を願った。その結果、次のような所見を得た。

- ① 基壇を含めて使用されている石材は、いずれも凝灰角礫岩である。
- ② 石材の凝灰角礫岩は変質により緑色を呈し、いわゆる緑色凝灰岩（グリーン・タフ）に属するものである。
- ③ 緑色凝灰岩は、新第三紀中新世前期～中期に生じたグリーン・タフ変動時の火山噴出物で、日本列島の内帯（日本海側）に広く分布している。
- ④ 鳥取県東部には中新世の地層が広く分布し、鳥取層群と呼ばれている。鳥取層群下部の河原火砕岩層（または河原火山岩層）が主として緑色凝灰岩からなる層である。
- ⑤ 河原火砕岩層は主に鳥取市南部の千代川左岸流域に分布するが、国府町～郡家町付近にも分布がのび、岡益近辺ではそのすぐ東方の

宝山を含め、袋川の両岸地域でみることができる。（福尾正彦）

## 五 まとめ

以上、今回の緊急保存処理事業に伴う各種の調査について、概要を記してきた。

ここでは、今回の調査の成果と今後の問題点について述べたい。

- (1) 石障内の現床面下約二五センチのところに切石を利用した床石が検出され、基壇上面をなしていると推測される。
- (2) 円柱を支えている礎石は扁平な直方体の切石と推定され、基壇上に直接据えられていると考えられる。
- (3) 現石障の地覆石は、修営工事の行われた明治三二年～三三年以降に据え直されている。したがって、石障もその際に再編成されている可能性が高い。西面石障北側長手部に認められる「矢」もあるいは、同時期の痕跡かと思われる。
- (4) 文様は、三種認められた。円柱裾部に浮彫りした二重蓮弁、中台状石下面のパルメットの浮彫文、石障などに刻された七箇所「S字状」文様である。
- ① 前二者は遺存状況が良好ではなく、その当初の文様を復元することは難しい。かといって、先学の見解を鵜呑みにすることも細部の点で疑問がある。

② 後一者の円枠内の刻印も細部をみると、それぞれで相違がある。ここで刻印された石材をみてみると、いずれも幅〇・六メートル、高さ二メートル以上を測り、厚さも判明するものでは〇・五メートルに近い。ある程度の大きさをもつ堂々とした切石であることが知られる。岡田保造<sup>(20)</sup>により城郭の石垣石材との関連性が指摘される所以であろう。刻印の場所やその石材の配置に規則性を見出すことができないことも、示唆的である。

(5) 先人達が関心を寄せていた尺度論については、その基本的なデータを提示したのみで極力言及を避けた。使用石材が構築当初の位置関係を保つかどうか疑問があることと、風化が進み、隅角部分の形状が損なわれ、厳密な計測値を得られないことなどのためである。

(6) 今回の緊急保存処理事業は一月六日に終了した。現在、石塔部は円柱と中台状石のみを旧状に復し、他の部材は近在の因幡万葉歴史館に貸付中である。また、保存処理の効能をよりとどめるため、現地において覆屋の設置を検討中である。

(福尾正彦)

註  
(1) 地元では、現在「いしどう」と呼び慣わすことが多いが、古老は「いしんどう」または「いしんど」と呼ぶ。ここではその言をとり「いしんどう」と呼ぶこととする。

(2) 斗形状石は、本来「石堂」に関する何らかの部材として使用されていたとも考える余地があるが、「石堂」中央の石塔の本来の部材とする積極的な徴証は得ら

れていない。

(3) 亀井照人「原始・古代(1)」『国府町誌』国府町 一九八七年

(4) 松藤和人他「糸谷古墳群」同志社大学文学部文化学科 一九九四年

(5) 国府町教育委員会『国府町内遺跡発掘調査報告書』一九八八年

(6) 津川ひとみ『史跡梶山古墳発掘調査報告書』国府町教育委員会 一九九四年

(7) 津川ひとみ『玉鉾等ヶ坪廃寺跡発掘調査報告書』国府町教育委員会 一九九一年

(8) 加藤隆昭他『因幡国府遺跡発掘調査報告書』VI 鳥取県教育委員会 一九七八年

(9) 加藤隆昭他『因幡国府遺跡発掘調査報告書』IV 鳥取県教育委員会 一九七六年

(10) 故事篇は現存していない。

(11) 上野忠親は、『民談記』の石障の記述が、『民談記』が刊行された貞享五(一六八八)年より、二十年以上前の寛文二年(一六六二)以前の状況を記していることを示唆しているが、『名蹟志』の見取図でも背の石障のうち南側の一石のみが倒壊せずに立っており、小泉友賢がこの状態をもって一方のみが立っていると表現した可能性もある。

(12) 荻原直正は、修理の際に境内から白鳳瓦三個とともに「寛和元年花山院」(\*寛和元年=九八五年)の銘のある鉄製仏餉器一個が掘出されたとしているが、これは現在まで確認されていない。

(13) 福山敏男「岡益石堂」『鳥取名宝図録』一九五九年

川勝政太郎・山田幸「因幡岡益の石堂」『史迹と美術』第三〇五号 一九六〇年

(14) 荻原直正「岡益の石堂―注目ひく忍冬模様―」『砂郷文化』第一五号 一九五五年

(15) 川上貞夫「岡益の石堂」鳥取郷土選書第六編 久松文庫 一九六〇年

川上貞夫「岡益の石堂」一九六六年(一九九七年復刻)

川上貞夫「因幡のふるさと―国府町の歴史と文化―」国府町 一九六八年

(16) 森浩一・古田武彦「対談日本古代の石造物―岡益の石堂を中心に―」『東アジ

アの古代文化』早春二二号 一九八〇年

森浩一・江上波夫・田村節子氏の未発表の見解については、一九八四年七月の「日本海文化を考える会」例会等の記事が『山陰中央新報』一九八五年九月三〇日、一〇月一日・二日付「岡益石堂（鳥取・国府）を採る」に掲載されている。

(17) 平勢隆郎「岡益石堂の設計・建築基準単位―石燈籠のモジュールを求める単位図形―」『鳥取大学教育学部研究報告』（人文・社会科学）第三六卷第二号 一九八五年

平勢隆郎「謎の石造建築―岡益石堂」ふるさとブックレット七 一九八七年

(18) 岡田保造「岡益の石堂」の刻印』『古代学研究』九七 一九八二年

(19) 石谷寸美子「岡益石堂造建者に関する一試論」『鳥取県博物館協会会報』三八 一九八八年

(20) 註18に同じ